

は、『新佛教』が植民地行政・教育・布教の当事者達も含む多様な人々を網羅するネットワークであることはわかったが、そのことで戦争反対か賛成の二項図式を超える可能性と、植民地文化に対する「上から目線」の態度を克服する可能性があったのかとの質問がなされた。高橋は、『新佛教』が様々な陣営をつなぐ言論の場であったがゆえに、可能性としてはありえたが、社会主義弾圧に屈して廃刊に追い込まれた事情を考えると、その後の国家神道体制下で独自のポジションを保ち得るのは難しかった、と答えた。守屋報告に対しては、戦争協力者が批判者か意見がわかれる鈴木大拙について、意見をさらに聞きたいとの問いかけがあった。これに対して守屋は、「潜在的な批判者」といえるのではないか、エッセイや著作などの公的な発言以外に、私的な書簡や日記をあわせて検証する必要があると答えた。坂本報告に対しては、鞍点戦略のうち何をもって「最善」とするのか、高嶋の具体的活動から抽象的思想が生まれた例はないのかという質問がなされた。坂本は、鞍点戦略という捉え方は、高嶋が自身で信じる内容を最大限言えたかという点のみを問題にしており、後世におけるその主張の評価は別の問題である、高嶋の具体的活動と抽象的思想の相互作用を考察するには、『新佛教』の時代よりも、資料があれば大正一〇年の聖徳太子一三〇〇年法要のほうが有意義であると答えた。

今回のパネルを通じて、過去三年間のパネルも含めた新仏教研究(さらには近代仏教研究)の課題が明確になった。この四年間の取り組みを共同研究プロジェクトの成果としてアウトプットできればと思う。

日本宗教の環境倫理と社会活動

代表者・司会 寺田喜朗
コメンテータ 小島伸之

シンブルライフ普及センターの

仏教理念と市民的实践

小笠原 宏 樹

環境問題に取り組む宗教者の一例として、静岡県の一寺院に事務所を置くNPO法人シンブルライフ普及センターをとりあげる。メンバーは既成教団(仏教・神道・キリスト教)に属しつつ「簡素な生活文化の実践による持続可能な社会づくり」を呼びかけてきた。

一 政教分離原則と全体の利益増進への貢献

NPO法人は、「宗教の教義を広め、儀式行事を行い、及び信者を教化育成することを主たる目的とするものであつてはならない(NPO法第2条第2項第2号イ)」とされる。ただ、これは一般的な公益(人権・平和・環境・健康等の世俗的価値)増進をめざすNPO活動まで宗教者に禁じたものでない。そこで当該団体の定款第3条(目的)では、このライフスタイル見直し運動について「この法人は、古今・東西の人文・社会思想あるいは流行等にあられた『簡素な生活』様式と、これに関連する科学技術上の実際的问题を、研究者、経営者、市民が共同して調査・研究し、その広範な領域のなかから今後の現代生

活に一層適合的な知識・理論・技術体系である『シンプルライフ』スタイルの構築・確立をはかる事業を行う。また『シンプルライフ』スタイルの国内外一般への教育・交流・提言事業を展開しつつ、…中略…生活の充足度を維持し、健康増進をはかり、省エネルギー・省資源を達成させ…中略…広く全体の利益の増進に貢献することを目的とする」という。つまり、「シンプルライフ」スタイル研究・構築を前段とし、後段は「シンプルライフ」スタイル普及という二段階の目標設定にあて、宗教的（あるいは仏教的）要素は、「古今・東西の人文・社会思想あるいは流行等にあらわれた『簡素な生活』様式」の中へ括り込む形に整えられている。要は、活動の一つが「簡素な生活様式探求」であり、各宗教の倫理観や教義は背景として扱われ、述語そのままの引用は極力避けられる形だったと理解できる。

二 前身としての「地球文明シンポジウム二〇〇〇」

この方針は、技術者出身の個性的な一僧侶が創めたシンポジウム活動に基づく。当該団体の前身は「地球文明シンポジウム二〇〇〇」（主宰：内藤歆風「日蓮宗」）であり、二〇〇〇（平成十二）年六月の第一回豊かさシンポジウムでは「充足革命への提言」を謳って次のように言う。「二〇世紀を支配する市場経済システムは、『欲望』『所有』『個』をキーワードに発展し、その結果今日の地球環境問題の根本原因である資源多消費の構造を生み出した。この市場経済システムの機会費用として出現してきたのが、『豊かさ』と幸福感の乖離と価値観の欠落』『公共の場の喪失』『時間消費に伴う家族・地域社会の崩壊』である。今日の持続不可能な社会・経済システムは、地球環境を破壊す

る前に、人類が築き上げた社会システム自体を破滅へと導きかねない。社会システムとしての迅速な対応を行わない限り、テクノロジーを中心とする環境効率革命だけでは二一世紀の人類に未来はない」。この観点を活かすアクションプログラム実現のため、当該団体の設立に至ったものである。

三 法人認証後のシンプルライフ普及センターの活動

運動（啓発）型NPOとして設立後八年で三十四回のイベントを開催した。内訳は、土曜学校シンプルライフ講座（通例の学習会／年二～四回開催）をこれまでに二十二回。生活文化講演会（特例の講演会／年一回）を八回。市民大学講座（伊東市の委託事業）一回。五周年記念シンポジウム一回。内部学習会を二回。他機関・他団体に事業協力（ライフスタイルフォーラムほか）多数。なお土曜学校・生活文化講演会の学習テーマについて付言すれば、環境科学など網羅・理念的な初期のものから、老化・健康など個別・具体的話題へと遷移している。

現代日本の大学生のモノ供養観

隈元正樹

我が国では、ヒトに限らず、動植物や、無生物（モノ）にまで、生命や意識の存在を認め、それを畏れ、供養してきた伝統がある。人形供養、針供養、筆供養などはその代表的なものである。近年でも、それは廃れるどころか、パソコン供養やテレホンカード供養にいたるまで、次々と新たな対象を加えてお